

『言葉の意味に思う-2.5』

年に一度（2年前より）、当コラムにて、普段、見聞きする言葉で、違和感を覚えたり、「なるほどね」と納得したりしたケースを取り上げております。今回は、諸般の事情により、「三つ目」からは、過去のコラムからの再掲です。よって、タイトルも「-2.5」となっております。

一つ目が「Society5.0」。「ソサエティーごてんぜろ」と読むそうです。将来の日本の在り様だそうです。恥ずかしながら、私、まずこの言葉の読み方で「はて？」と思っていた次第です。そして、未だに不明なのが、「5」ではなく「5.0」と、小数第1位まで使った表記をしているところです。例えば、携帯電話では、最新機種を「5G」とか「第五世代」と称しています。ですから「5G」の前は「4G」です。一の位での表記で、違和感なく受け入れられます。

私、一応ネットで調べたのですが、なぜ「5」ではなく「5.0」なのか。その答えを見つけることはできませんでした。そこで、私の想像です。「Society4.0」は、「情報社会」と定義されています。そして「Society5.0」は、当初は「超スマート社会」という言葉で言い換えられていました。この段階で、「スマート？何が？」となってしまうのですが、最近は、「仮想空間（コンピューターが作る）と現実空間の高度な融合→人間中心の社会」という説明を目にしました。「ますます分からん！」状態に陥っています。

それはさておいて、小数第1位までの表記の理由です。私の想像ですが、「社会の在り様は、技術革新や制度改革などによりちょっとずつ変化し、その変化が積み重なって、数十年後には極めて大きく変化した社会が形成される」という捉えではないかと思っています。従って、そのちょっとずつの変化の度合いを「0.1」として、なおかつ変化の連続性の意味も併せ持っているのではと推測します。ならば、現在は「Society4.1」あたりかと勝手に想像しています。いつものことですが、これは私見であり的を外しているかもしれません。在りたい社会の姿としての一つの表現であり言葉なのですが、「結局、それはどういうこと？」と、私ならなので、日本語で分かりやすく、合点がいく表現にして頂ければ有り難いなと思っております。

二つ目は、「重複」。私、つい最近まで、どちらかという「じゅうふく」と読んでいました。日々の生活では、「重複」という言葉を使う頻度はそう高くないのですが、今年は使う場面が増えております。それなりに公的な場面でも使うことがあり、発する前に一瞬躊躇するのですが「じゅうふく」と言っておりました。相手方も「その言い方は違うでしょ！」という雰囲気でもなかったので、「ああ、間違いではなさそうだ」と感じながらも、さすがに気になって調べてみました。本来の読みは「ちょうふく」だそうです。また「じゅうふく」は、本来的には間違いですが、現実によく使われて定着している読み（「慣用読み」というそうです）なので使って大丈夫とのこと。加えて、今回勉強になったなあと思ったことがあります。「重」を「ちょう」と読むか「じゅう」と読むかのおおよその目安です。「かさなる」の意の場合は「ちょう」。重量が大きいの意味の場合は「じゅう」とのことです。ただ、「重箱」の読みは「じゅうばこ」。箱が重なっているけどなあ・・・この点は、前述の目安から外れますが、絶対的な基準ではないというところで納得しています。いずれにして、調べたことで安心し理解も深まりました。

三つ目は「今の現状では・・・」。テレビを観ていると、時々この言い方に遭遇します。「現状」は、「現在の状態」もしくは「今のありさま」を意味します。ですから、現状の前に「今の」をつける必要はありません。これは、「机上の上に置きました」と似たような感じででしょうか。「今の」から始めるのであれば、「今の状況」とか「今の状態」という言い方になると思います。端的な言い方としては、「現状では」でいいのではと思っています。

四つ目は「難易度」の使い方。「難易度が高い」と、けっこうな頻度で聞きますが、その意味は「難しさが高い」だと思います。「難易度」の意味は、「難しいか、たやすいかの度合い」との説明がほとんどです。「入試の難易度」なら、合格の難しさとそうでない状況を意味し、この場合は「難易度が高い学校」であれば、なかなか合格しづらい難関校を意味し、「難易度が低い学校」は、入りやすい学校の目安を意味することになりますので、間違った使い方ではないと思います。ただ、この場合も、一般的には「難易度」よりも「偏差値」の方が広く使われています。

難しさの程度として使うのであれば、「難度」が適切だと思っています。体操競技やフィギュアスケートにおける技の難しさを表現する際、「難度が高い」とか「高難度な技」が使われています。このような表現を見聞きすると、私としてはとてもスッキリします。

五つ目。学生の頃にたまたま目にしたある解説が絶対と信じ、以後こだわりを持って使っていた言葉があります。「的を射る（まとをいる）」です。その解説には、「“的は射る”ものであり、“的を得る”は誤用。“当を得る（とうをえる）”が正しい」と。実は私も、「的を得る」の方を使っていました。ちなみに、「的を射る」の意味は、うまく目標に当てることから転じて、“うまく要点をつかむ”であり、「当を得る」の意味は、“道理にかなっている。また、要点をしっかりと押さえている”とのこと。私は、素直に「なるほど」と納得し、以後、「的を射る」という表現にこだわってきました。

教員は、子どもにとっては最適な言語環境でなければなりません。よって、言葉の使い方には細心の注意を払う必要があります。ですから、同僚（管理職になってからは、職員が）が、会議の中で「それは、的を得ていると思います」というような発言を耳にすると、「それは違うよ。“的を射ている”だよ」と、つい心の中で反応してしまいます。

ところが最近、「的を得る」という表現が、誤用ではないようだということを知りました。自分としては、ちょっとショックな出来事でした。ある国語辞典では、改版に当たって再検証を実施し、「得る」の字義を「うまく捉える」の意と捉えれば、「的を得る」も誤用とは当たらないとしています。また、平成24年度の文化庁による「国語に関する世論調査」によれば、30代以降の世代では、4割強の方が本来の言い方ではない「的を得る」を選んでいると報告されています。「的」を、「標的」と狭義に解釈すれば、「的を得る」は、正しい言い方ではないと思うのですが、「的」を「要点」や「核心」を意味する例えとして押さえたならば、それはそれで意味が通るなと納得しています。

とは言え、これからも、私は、本来の言い方である「的を射る」にこだわりたいと思っています。なお、「的を射る」について調べているうちに、「正鵠を射る（せいこくをいる）」という表現を知りました。「正鵠って何だ？」の状態でしたが、「正鵠」とは、弓の的の中心にある黒点のことを言い、「正鵠を射る」とは、“物事の急所や要点をつく”意味だそうです。これについては、“目からうろこ”の状態であり、自分としては機会があれば使ってみたい表現だなと強く感じた次第です。